

遺伝研三十周年

国立遺伝学研究所

創立30周年記念記録

1979

遺伝研三十周年

国立遺伝学研究所

創立30周年記念記録

1979

題字 田島 弥太郎 所長

目 次

○記念アルバム

I	創立30周年を迎えて……………	1
II	式 辞……………	4
III	祝 辞……………	8
IV	祝 電……………	18
V	創立30周年記念行事概要……………	21

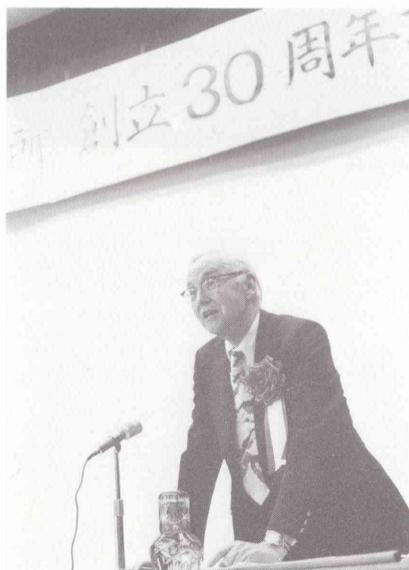
記念アルバム



▲田島所長式辞



▲杉村 隆博士講演



▲J.F. Crow博士講演



▲文部大臣祝辞を代読する井内事務次官



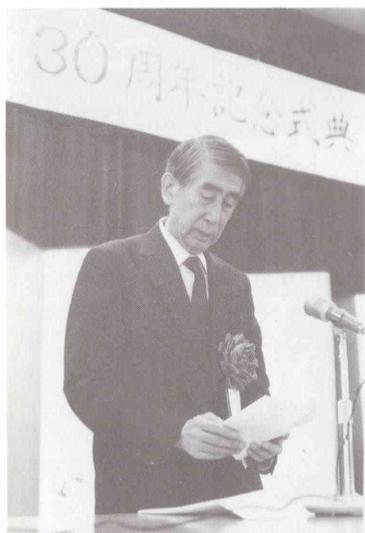
▲来賓 右壇上



◀来賓 左壇上



▲茅日本学士院会員の祝辞



▲藤井評議員会長の祝辞



▲伏見日本学術会議会長



▲受付風景



▲吉田部長の案内で控室へ
向う小熊初代所長夫人



▲開式までのひととき



▲控室風景



▲語らい



▲控室風景



故駒井博士リリーフの前で▶
製作者下山 昂氏



▲祝宴場風景



▲進行風景



▲長谷川前三島市長



▲祝宴場風景



▲特別資料展示室



▲研究室の見学風景



◀職員
のよ
ろこ
びの
風景
▶



I 創立30周年を迎えて

私達の国立遺伝学研究所も、本年（昭和54年）6月1日をもって創立30周年を迎えることになった。

顧みて30年。戦後の困難な時期に創設されて以来、その道は勿論平坦であった筈はなく、研究所周辺に茂る樹木に、また建ち並ぶ建物に、あるいは研究用の機器にまで、その時その時に精魂を傾けた、諸先輩の喜びや悲しみが刻み込まれている様に思えてならない。そして今、研究所のすぐれた業績は、国の内外を問わず益々研究所の声価を高めている。

田島所長は、かねて抱かれていた本研究所の創立30周年記念行事の実施を提起され、大賛成のうちにその実施は決まった。昭和54年1月のことである。直ちに行事実行委員会を設置、検討の結果、記念行事として、

1. 創立30周年記念式典・祝賀会
2. 創立30周年記念講演会
3. 記念誌「創設の頃の思い出」の刊行
4. 記念植樹

以上を実施することが決められた。

記念式典は、当初6月1日を予定していたが、たまたま、国立教育研究所が同日に同じく30周年記念式典を行う予定で既に招待状等も印刷済みとのことなので、本研究所では6月5日舉行することとなった。

まず、記念講演会である。6月4日午後3時から5時まで本研究所の講堂で開催され、講師ならびに演題は次のとおりであった。

「環境中の変異原ならびにがん原物質」

国立がんセンター研究所長 杉村隆博士

「Hybrid dysgenesis and other strange genetic phenomena」

(雑種退化および他の奇妙な遺伝現象)

ウィスコンシン大学教授 James F. Crow博士

研究所内外から多数の聴講者があり、極めて盛会であった。なお、当日所員一同正面玄関前において講師を囲み記念撮影を行ったが、所員のほとんど全員が参集しての記念撮影は、文字どおり良き記念となることと思う。

翌6月5日、晴天に恵まれ初夏の風かおる中、午前11時から講堂において記念式典を挙行了した。

式典には、文部省はじめ関係官庁・大学・学界ならびに地元関係者等約130名の来賓がお見えになった。田島所長からの式辞で、創立当時の3研究部門から現在の10研究部門、1研究施設を擁するまでに成長したことについて関係各位に対する謝辞、また所員一同今後益々研鑽を重ね、当所設立の目的に副うよう一層勉勵努力してほしいとの所感が述べられた。これに次いで、文部大臣（井内文部事務次官代読）、伏見日本学術会議会長、藤井評議員会会長、茅日本学士院会員ならびに坪川緯度観測所長から、設立当時の苦労話や厚情あふれる激勵称讚の祝辞があった。このあと、各方面からの祝電の披露が行われて式を終った。

引きつづき同講堂において祝賀会を催し、田島所長のあいさつに次いで、森脇前所長の乾盃で始った。終始なごやかな雰囲気の中で祝盃がかたむけられ、思い出話に花がさいた。井上日本人類遺伝学会会長、大島日本遺伝学会会長、奥田三島市長、長谷川前市長ならびに岡野先生からテーブルスピーチがあり、宮山先生の声高々の万歳三唱をもって祝賀会を終った。

なお、このあと希望される方々に見学係の案内で特別資料展示室や所内見学を行った。

見学が終り来賓がお帰りになられたあと、祝賀会に参加できなかった所員一同であらためて祝賀の会をもった。

ここに、予定した一応の行事を滞りなく終えることができ、所長以下所員一同肩の荷を下ろすと同時に無事、盛会裡に記念式を終了したことを心から喜びあった。

記念誌については、突然の御依頼にもかかわらず、ほとんどの方がお忙しいところを早々に原稿をお寄せくださり、その御厚意と、また行事实行委員の人達の努力で短期間にもかかわらず“創設の頃の思い出”として180

頁にもわたる冊子を記念式当日配布することができ、まことに喜ばしいことであった。

これで、記念行事は記念植樹を残すのみとなった。

一つの機関が一つの行事を行おうとするとき、人手、経費、関係方面との連絡調整その他等々……細かく云えば天気の心配まで、要求されるエネルギーは相当なものである。「天の時、地の利、人の和」と言うこともあるが、特に「人の和」の重さをしみじみと感じさせられる。エネルギッシュな田島所長の陣頭指揮の下に遺伝研を心から愛してやまない所員一同の、骨身を惜しまぬ姿には誠に胸を打たれるものがあった。

ここに創立30周年記念行事を、一応、締めくくる意味で、所長式辞、来賓祝辞そして経過情况等を整理して記録することとした次第である。後日の参考とでもなれば幸である。

Ⅱ 式 辞

国立遺伝学研究所長 田島 弥太郎

国立遺伝学研究所は、本年6月1日をもって創立30周年を迎えました。本日、ここに朝野の貴顕をお迎えして記念式典を挙げることができましたことは、所員一同と共に私の慶びとするところであります。

創立当時僅か3研究部門として発足した当所も今では10研究部門、1研究施設を擁する御覧の通りの研究所に成長することができました。この間、直接管理の立場にある文部省はもちろん関係各省庁、静岡県、三島市、地元の皆様方から一方ならぬ御支援をいただきましたことは感謝にたえない処であります。この機会に厚く御礼申し上げます。

さて、当研究所30年の歴史をふり返って見ますと、さまざまなことがありました。当所が戦後の混乱の中から、文化国家建設の一翼を担って設立されたのは昭和24年であります。それに先だって遺伝学の振興が基礎学の面でも応用の面でも極めて重要であるとの認識に立って、日本遺伝学会が国立遺伝学研究所設立の運動を起したのは昭和15年のことであります。この運動は、その後戦争のために中断されましたが、平和の回復と共に先輩諸先生方の熱意により精力的に再開されました。当時わが国は連合国の占領下にあったため、設立のためには政府はもちろん総司令部の承認をとりつけることが絶対条件でありました。ところが、この接渉が思うように行かず、文部当局は大変な御苦勞をされたと同っております。このことについては、当時の科学教育局長だった茅誠司先生が本日御臨席されておられますので、先生から直接伺いすることができるかと存じます。

当研究所の業績は今日では広く世界に認められるに至り、三島の名前は世界の各地に知れわたっております。

このことは、まず創設当初の3研究部長に当時のわが学界におけるトッ

レベルの碩学をすえ、これを遺伝学会の諸先生方が力を合わせて支持されたことが大きな原因になっていると思います。即ち初代所長小熊捍先生は自ら研究第2部長を兼ねられ、研究第1部長には九州大学名誉教授田中義麿先生を、研究第3部長には京都大学名誉教授駒井卓先生を迎えられて研究陣の充実に最善をつくされたのであります。

2代目所長木原均先生は、特に研究の国際交流に意を用いられ、つとめて海外の有名な学者を日本に招へいされたばかりか、国際遺伝学シンポジウムや国際遺伝学会議をわが国で開催するなどして、戦争以来永い間鎖国状態におかれたわが国の若い研究者達の目を、海外に開かせるために最大の努力をささげられました。これにより優秀な人材が多数外国に留学することとなり、わが学界発展のための大きな転機となったのであります。

また、先生はロックフェラー財団等から多額の研究費を受けるための労を惜しまれませんでした。これによって当所における「栽培稲の起原の研究」「動物における放射線の遺伝的影響の研究」「人類遺伝学の研究」などが戦後研究費の乏しい時代に大きく推進されたことは申すまでもありません。

また、当研究所の国際的評価が高まった裏に、故フローラ・アリス・リリエンフェルド博士の功労があったことを忘れることはできません。博士は、昭和4年来日されて91才で逝去されるまで、木原均先生のよき協力者として研究一筋に生き抜かれたことは人のよく知るところであります。当研究所に勤務されるようになってからの博士は、透徹した論理と該博な語学の知識とをもって所員の書く外国語論文の校閲に献身的な努力をささげられました。このため、当所の研究者は自信を持って国際学術雑誌等に論文を発表することができたわけであります。

次に申し上げたいのは、故竹中要博士と故松村清二博士の功績であります。

竹中博士は、当所の前身とも言うべき財団法人遺伝学研究所理事から国立遺伝学研究所創設に伴い副部長として迎えられました。小熊初代所長を助けて施設や諸制度の整備に全力を傾注されました。今日見る所内の一木一草に至るまで博士の手にかからないものはなかったと言っても、おそ

らく過言ではないでしょう。いま、当研究所の正面前には見事な桜並木がありますが、これまた博士の手がけられたもので博士亡き後も桜博士の名で市民から敬慕されて居ります。

また、松村清二博士は2代所長木原均先生の愛弟子として、研究のかたわら所長を助けて研究所の経営にあたられ、積極的發展策を推進すると共に幾多の研究施設を残されました。沼津・三島地区に石油コンビナート進出が計画されました時、博士は当時の市長長谷川泰三氏の要請を受けて、調査委員長を引き受けられ松永英博士らと共に精力的に調査にあたられました。その結果まとめられた報告書は、市民運動バックアップのための科学的根拠を提供して、三島市の緑と太陽が守られました。この功績は、永く市民の間に語りつがれることでありましょう。

第3代所長森脇大五郎先生は、古典遺伝学に根をおろした当所の研究陣を近代遺伝学の流れの中でどのように性格づけて行かれるかに苦心され、均衡原理を貫かれて遺伝研今日の姿を完成されました。

さて、当所の使命は申すまでもなく遺伝に関する基本原理の解明およびその応用を通じて世界の文化に貢献することであります。

幸いにして創立以来3代にわたる名所長の指導のもと、所員各位の研鑽により幾多の業績を挙げることができました。文化勲章の栄に輝く木村資生博士の分子進化の研究は正にその代表と言えましょう。さらに木村博士の業績を乗り越えて第二・第三の受賞者が輩出することを切望したいと思います。

今日、生命科学は驚異的な速さで發展を見ておりますが、その中心課題は遺伝に関する問題であります。特に最近ではDNA組換え技術の發展により、交配不能な種と種の間でさえも遺伝子を交換したり結合させたりすることが可能になって参りました。その結果全く新しい生物種さえ人口的に作成することができるようになったわけであります。これは原子エネルギーの解放、宇宙旅行につぐ近代科学の大きな進歩と申せましょう。反面このような研究は、従来予想もされなかつた危険をもたらすかも知れないという心配を生みました。その結果、研究の自由を制限する問題とか、

研究に対する社会の容認の問題とかが新たに提起されることになったわけ
であります。もとより科学の研究は終局的には人類に幸福をもたらすもの
でなければならない筈であります。このことを肝に銘じつつ所員諸氏は研
究に取り組んでいただきたいと思ひます。

このほか、30年の経験から当所のあり方について検討すべき幾多の問題
が生まれて参りました。即ち創立以来の懸案であります国立大学共同利用
研究所への転換問題、生命科学の発展動向に応じた研究部門の再編成や研
究内容刷新の問題、各種研究施設の効率的利用の問題、研究要員の重点配
置や流動化の問題等を挙げることができます。どれをとりましても解決は
容易ではありませんが、要は如何にして当所設立の目的に副うための成果
を、最も効果的に挙げるかという観点から解決をはかるべき
ものと考えます。

所員各位におかれては、現状の安きに甘んずることなく、今日よりも明
日の進歩に向つて努力しながら、当研究所設立に寄せられた諸先輩の期待
に副いよう、一層勩励努力されることを希望してやみません。

ここに所感の一端を述べて式辞といたします。

Ⅲ 祝 辞

祝 辞

文部大臣 内 藤 誉 三 郎
(代読 次官 井 内 慶 次 郎)

初夏の風薫る本日、国立遺伝学研究所創立30周年の記念式に当たり一言お祝いの言葉を申し上げます。

本研究所は、昭和24年6月我が国唯一の遺伝学に関する研究所として、広く学界の期待に応えて創設されました。その後数多くの優れた研究成果をあげ、その業績は国内はもとより国際的にも高く評価されてきたところであります。このことは、ひとえに初代所長小熊捍氏から木原均氏、森脇大五郎氏を経て、現所長田島弥太郎氏に至る歴代所長を始め所員各位のたゆまざる努力と研鑽のたまものであるとともに、創設以来本研究所の発展に御協力いただいた日本遺伝学会、日本人類遺伝学会、日本育種学会その他関係学会並びに地元静岡県及び三島市その他関係各位のお力添えによるものと存じます。ここに、その業績をたたえとともに、関係者各位に対し深く謝意を表する次第であります。

科学技術の発展が人類社会にもたらす恩恵は極めて大きなものがありますが、その発展の基盤をなすものは基礎的独創的な学術研究であります。今日飛躍的な発展をみている生命科学の分野において、遺伝学の基礎的研究をつかさどる本研究所の果たす役割も、いよいよ重要なものとなってきております。幸い本研究所は先人の優れた業績を継承し、更にこれを発展させ常に新しい課題に取り組み学界及び社会の要請にこたえてこられたのであります。

また、昭和52年度から年次計画で遺伝実験生物保存研究施設の建設が進められておりますが、この施設が完成した時には学術研究の進展に更に大きな役割を果たすものと期待されます。文部省といたしましても本研究所の要請に応じて一層その充実に努力する所存であります。

終わりに、今後ますます研鑽を積み重ね遺伝学研究を通じて人類の福祉に貢献されることを希望いたしますとともに、御列席の各位におかれましても本研究所の発展に一層の御支援を賜りますようお願いいたしまして、お祝いのごあいさつといたします。

祝 辞

日本学術会議会長 伏見 康治

本日、国立遺伝学研究所創立30周年記念式典が挙行されるにあたり、日本学術会議を代表して、お祝いの言葉を申し述べる機会を得ましたことは、私の深く喜びとするところであります。

国立遺伝学研究所は、期せずして日本学術会議誕生の年と同じ昭和24年に創立されたわけですが、昭和24年と言えば未だ戦禍の傷跡が随所に残り、人々は社会不安と生活的不安定の中で暗澹たる暮らしを余儀なくされていた時代であります。そうした状況の下で、新しい日本の建設を目標に、遺伝学研究所の発展のため理想と抱負をかかげて精魂を傾けられた諸先生方の並々ならぬ御努力と熱意に対しましては、深い尊敬の念を感じますと共に、今しみじみと思いを新たにするのであります。

原子爆弾による被爆という世界で類をみない惨事に見まわれた我が国ではありましたが、真理の探求に対する情熱を失わず、先見性のある科学者の叡知を遺伝学研究所に向けられた先人の態度は、今日なお多くの科学者、研究者のもって範とする所であると確信するのであります。

その後、歴代研究所長をはじめ研究員ならびに職員諸氏には、遺伝学研究所を30年間の長年月に渉って忍耐強く継続推進され、種々困難や障害を乗り越えて遺伝学の発展とその研究体制の整備充実に努力され、今日を築きあげられました。ここに、深甚なる敬意を表する次第であります。

近時、遺伝現象の本質的理解は、理論的にも実験的にも瞠目すべき深さに達しましたが、当研究所がその面において世界的評価のある貴重な貢献を果されてこられたことは、まことに御同慶に堪えません。

また一方、現今遺伝学研究の活動領域は広範多岐にわたり、食糧と農業、医療、環境、放射線に関する影響などの諸問題に至るまで、多くの分野に亘る複雑な現象を学問的に究明されることは、学術全般の発展のみならず、人類の福祉増進に大きな貢献を果すものと考えるのであります。

日本学術会議といたしましても、昭和24年以来遺伝学研究連絡委員会を設けて、国の内外との研究連絡を図っており、また国際遺伝学会議を1956年、1968年の2回にわたって主催しております。最近では、昨年ICSUのCOGENEに対応する国内機関としてCOGENE研究連絡会を設置し、DNA組換え技術の扱い方、研究の進め方について鋭意審議を行って参りました。また、昭和52年には「我が国におけるDNA分子組換え研究の進め方に関する日本学術会議の見解」を発表し、さらに翌年文部省学術審議会、科学と社会特別委員会が中間報告として示した、いわゆる組換えDNA実験指針案に対しましては、日本学術会議の意見をとりまとめるなど及ばずながら科学者集団としての職責を果して参りました。

貴研究所が、設立当初、画期的な体制と陣容による構成で組織されたことは、さきに日本学術会議が提唱した共同利用研究所の設置構想と全く軌を一にしたもので、今後とも貴研究所ともども、我が国ひいては世界の科学の振興のために、より一層の努力を傾注して参る所存であります。

終りに、国立遺伝学研究所が、ここに輝く30周年を迎えられたのを契機として、諸先輩の残された多くの御功績を生かしつつ、新たな飛躍を果され、多くの業績をあげられることを期待してお祝いの言葉といたします。

祝 辞 国立遺伝学研究所評議員会会長 藤 井 隆

本日、ここに国立遺伝学研究所創立30周年記念式典が挙行されるに当り、本研究所評議員会を代表して、お祝いの言葉を申し上げます。

本研究所は、昭和24年6月日本遺伝学会のかねてからの要望により、この恵まれた環境の三島の地に創設されました。当時は、戦後も間もない頃

で、創設には困難な時期でありましたが、小熊・木原・森脇・駒井・田中の諸先生をはじめ、その他わが国遺伝学の伝統を支えてこられた諸先輩の熱意、また文部省その他関係各位の御尽力により、発足のはこびとなったものであります。

本研究所の規模は、当初3研究部門でありましたが現在では10部門1系統保存施設と約4倍となり、その研究業績が国内はもとより、国際的にも極めて高く評価されていることは申すまでもありません。

ごく最近に至るまで、本研究所がわが国における基礎生物学の分野でのほとんど唯一の研究所であったことを本日更めて想起することもよいことでありましょう。

今日、生物学は世界的にその重要性が深く認識されるに至っておりますが、遺伝学は広く考えますと古典的な意味でも、分子生物学のような新しい意味でも、生物学のすべてにわたっているものであります。

伝統ある本研究所の学問的活動が、今後ともわが国生物学全体の発展に大きな寄与をすることを祈念いたしまして、お祝いの言葉といたします。

祝 辞

日本学士院会員 茅 誠 司
元東京大学総長

私は、昭和23年に文部省の科学教育局長という生まれて始めてのお役人になりました。その前は清水勤二さんという、あとで名古屋工業大学の学長並びに名古屋の科学博物館の館長をされた方ですが、どうしてそういう身分にあまり似かわしくない仕事をやったかと言いますと、昭和23年に皆さん御承知の片山内閣が誕生いたしました。その片山内閣の文部大臣を、現在もお元気な森戸辰男先生がお引受けになりまして、そして森戸先生から当時ございました学術研究会議、今は無くなっておりますが、学術研究会議に対しまして、科学教育局長を推せんせよというお話がございました。当時は、まだ例のないことでございまして、学術研究会議の会長亀山直人氏、副会長瀬藤象二氏の両氏は、非常に熱心にその選考をされ

ましたが、不幸にして私が幹事か何かをやっておりまして、あの男がいいだろうというので研究室の反対を押し切って科学教育局長に推せんされて、私はそれを引受けて9ヶ月間お勤めいたしました。その間に、この遺伝学研究所の設立の問題が出てまいりました。

私は、もともと戦争前から戦争中にかけて、北海道大学の理学部の物理教室におりましたので、当時の北海道大学の理学部長であった小熊捍先生とは、非常に親しくしていただきました。従いまして、この遺伝学研究所のことを随分よく伺っておったわけであります。私の承わったところによりますと、木原先生はじめ駒井先生とか田中・小熊先生等が当時の片山総理の所へ行かれまして、種子無し西瓜をもって行かれて、「これが遺伝学研究の結果種子の無い西瓜である。もし、この西瓜に種子があったならば私はこの西瓜の皮で腹を切ってみせる」。そういう言葉をおっしゃったところが、片山総理は、ひどくびっくりして「何とぞ種子がありませんように」と祈られたそうです。切ったところ種子がなかったので幸いよかったです。それ位感激しまして、そして遺伝学研究所をつくろうという話になって、それからどんどんと話が進行してまいりました。ところで、そういう事情を私よく小熊先生から伺っておりましたのですが、そのつくる場所としてはこの三島に富士産業という工場があり、その跡がよいということで、ここにおられる岡野さんと一緒に私は一番最初に見にまいりました。中学校をつくるとか何んとか色々な話がありましたが、遺伝学研究所にもっともよい所ではないかということで、皆さんが設立の準備をなさるのに対して我々協力してまいったのですが、ところで当時は占領中でしたので、E.S.S.というEconomic and Scientific Section、その中にScientific and Technical Divisionというのがありまして、その副部長をしておりますHarry C. Kellyさんという方がおられまして、この方は皆さんも御承知の戦争直後にアメリカ兵が理化学研究所に入り込みまして、仁科先生の造られましたサイクロトロンを毀わして東京湾のどこか海の中に沈めてしまった。このことが、アメリカの学士院をえらく驚かせました。大砲とサイクロトロンの区別がつかない兵隊さんに、日本の科

学を託すわけにはいかないという言葉が、ジュエットという当時のアカデミー・オブ・サイエンスの会長から出まして、そして適当な人を日本に送って日本のサイエンスを守らせようということで派遣されたのが、このHarry C. Kelly さんでありました。ケリーさんは、当時はM. I. T. のRadiation Laboratory で研究しておられましたが、私の記憶では昭和20年の暮れであったと思いますが、日本に見えられました。最初に北海道大学に行かれたようですが、それはなぜかと言いますと、戦争中に日本でいろんな研究をやった中でよく分らないけれども殺人光線というのがある。あれは何だろうか。原子爆弾の方はサイクロトロンを毀わしてしまったので大したことはないし、またなかなかそんなことで原子爆弾が出来るわけではないというので問題にはならなかったのです。が、この殺人光線というのは、短波の強い電波を発生する原理でありまして、それを心配して北海道大学に見に行つた。見に行つて調べたところが、北大の応用電気研究所、そこの浅見教授というのが応待に出たのですがさっぱりよく分らない。そこで、自分はあなた方のサイエンスを守るために来たので毀すために来たのではないということを言ったところが、ようやく安心しまして戦争中疎開してありました当別というところの小学校に案内することになった。それで当別まで汽車で行つたわけですが、その行つた日に大雪が降つて歸つてこれなくなつてしまつた。ケリーさんの話では、見たところがそれはマグネトロンという短波の発信機を使った強い電波を発生する装置でしたが、1米先のウサギを殺すのがやつとであつたというので、ひどく安心してこんなのは何も問題にする必要はないということで歸つて来たようですが、その途中鉄道が雪のために動かなくて大変なさわざになった。そのとき自分は一人の兵卒を連れて行つたが、金銭も持っていないし鉄砲も持っていなかつたというので、その兵卒はすっかり怖気づいて大変だつたのですが、幸にしてその泊つた牧場で、朝になってフレッシュなミルクとバター等を出して御馳走をしてくれたので、すっかり元気づいて、そして馬櫓に乗つて歸つて来た。そういう経験からしまして、浅見教授がすっかりその世話をやいた。また、北海道大学のほかの科学者

等がおりまして、直接に接触をケリーさんとしたためにひどく喜ばれまして、どうも文部省を通じて科学者と接触するのではindirect すぎると、ぜひ直接に接触したいという希望がございましてそんな関係でサイエンス・リエゾン・グループというまず最初に理科関係の人達が集ってケリーさんと接触するというグループを作りまして、そのグループの委員長を、誰れか委員長にならなくてはいけない、委員長には誰れかならうと私は知らん顔をしていたところが、やはり東京に住んでいなくてはいけない、そのうえやはり中心問題は物理であると、そうすると私しかいなかったものですから、それじゃ俺じゃないかと言ったらそうだという。そんなのはいやだと言ったのですが已むなくしてそれを引受けて、それでケリーさんと非常に接触する機会が出来ました。実に真摯な方でしてケリーさんとはそれで非常に親しくなった。そこで遺伝研の問題が起りました際に、ケリーさんとはよく接触して話しておきましたところが、ケリーさんは勿論日本の研究者の意志は十分尊重しなければならないというので、遺伝研の設立にはもう全面的に賛成であるということで問題はなかったのですが、しかしほかの官庁例えば農林省等ではどう考えているかというような点が問題になりますので、文部省に私が行ってから農林省その他とよく折衝してみますと、皆さん反対はないけれども自分のところの遺伝研究に支障が起っては困る、そういう区別をはっきりさせておいてくれと、これはなかなか実際は難しい問題だったのですが、まあそういう問題もあって必ずしも私がそういうことを言うと叱られるかも知れませんが、必ずしも好意的ではなかった。悪意ではなかったかも知れませんが好意的ではなかった。その中でこの研究所をつくるということになりました。そして最後に私はC. I. E. という政府関係をつかさどる、そのルーミスさんという人だっと思うのですが、その方の所へ遺伝研の設立許可を願いにいったところが、遺伝研は三島などという遠くの方につくと閑古鳥が鳴くおそれもある。図書その他等で不便な土地であるから、研究者が十分利用出来ないから反対であるという。私はびっくりして色々調べてみますというと、ケリーさんが丁度そのときおらなかったのですね。それでプレッチさんとかヘン

ショウさんといったようなケリーさんの下で働いていた人達だけで、その人達は皆んな私に遺伝学研究所として三島はいい土地ではない、そんな所につくるのはやめたらどうかと勧告をする。それから私はルーミスさんに、ケリーさんは賛成だったということを行いましたところが、「書いたものがあるか。」という。書いたものはないと、口で約束しただけだったというところから「You are too optimistic.」という返事がきた。それで、すっかりがっかりしてそんなことでは駄目だということで私はもう帰って来てどうしようかと思案しておったときに、ケリーさんは短期間アメリカへ帰っておられたのですが帰って見えましたので、ケリーさんに会ってその話をしたら、そんなことは問題ではない、もう最初からいいことになっているのだからということで、ケリーさんが帰って来たたとんに解決をいたしまして、それでこの研究所が出来たというわけであります。私は一時どうなることかと思いましたが、なかなかこの行政というものは難しいことでございます。

私は、それで9ヶ月科学教育局長を勤めておりますうちに、大臣が森戸辰男さんそれから下条康磨さんそれにいま1人の高瀬 荘太郎さんの3人の大臣が替わりました。そこで私は科学教育局長というのがなくなりまして、大学学術局というのが出来たその機会に辞めてまいりましたが、私が文部省に9ヶ月おったということで、非常に大きな功績を残したと思うのですが、その大きな功績のただひとつのものは何かといいますと、大学教授を官吏として使うのは誠に馬鹿げたことであって、こういう人を使うべきではないという結論を文部省で得られたことだと思います。以後そういうことはなくなりましたが私は非常に喜んでおります。

本当に遺伝研がそういうような経緯を経て成立しまして、有名な研究所になって今日世界的に遺伝の研究をする人で誰知らぬ人はいないという研究所に育ったということのきっかけに、私が関係していたということは私は非常に光栄に思っております。これをもって、私の祝辞といたします。

祝 辞

緯度観測所長 坪 川 家 恒

本日、ここに国立遺伝学研究所創立30周年記念式典を挙行されるにあたり、お祝いのことばを申し述べる機会を得ましたことは、私の大きな喜びとするところであります。

顧りみますと、貴所初代所長小熊先生は昭和14年に開催された第12回日本遺伝学会において国立遺伝学研究所設立の緊要を説かれ、更に翌15年第13回大会においては満場一致をもって設立すべきことが可決され、以来国立遺伝学研究所の設立実現のためにあらゆる努力と活動を続けられました。その間内閣の交代、国会の解散、用地問題、GHQ等との交渉の停頓など幾多の困難に出会ったが、これらの問題の解決に全力を傾けられた結果昭和24年5月31日文部省設置法の公布となり、6月1日をもって待望10年の長きにわたった国立遺伝学研究所の誕生を遂に見るに至りました。この先生の偉大なる業績にあらためて深く敬意を表するものであります。

爾来30年間歴代所長はじめ所員の皆様は孜孜として精緻周到に、すべての生命現象の本質である遺伝とその関連事象を研究対象とし、遺伝子の本体の追求をはじめ遺伝子の形質発現機構、伝達機構およびそれらに及ぼす人為又は自然環境の影響の解明、ひいては生物の進化に関する基礎的研究等あらゆる角度から総合的に研究を進められ、その研究業績は国際的にも高く評価されていますが、更に組織的にも10部20研究室に拡充をはかる等、世界屈指の遺伝学研究所のメッカをつくりあげられました。ここに創立以来の皆様の御苦勞に対し心から敬意を表します。又本研究所が今日あるに至るまでには地元各位のなみなみならない御協力が積み重ねられていることと拝察し、同僚機関として地元御当局はじめ関係者に深甚の謝意を捧げるものであります。

さて、一般に学術の研究は進めば進む程その前途は広がり深まっていささかの停滞も許されないことは、私達基礎研究にたずさわる者の思いをひとしくするところでもあります。このような視点に立ちますと、私達の研究

機関の責務の重要性は昔の比ではないことを痛感いたします。特にこの意味で発足当初から世界の第一線を歩み続けてこられた輝かしい伝統のもとに、優れた研究陣容と新鋭の設備とを兼ね備えた本研究所の一層の御発展を祈り、かつ同僚研究機関の間の提携協力がいよいよ緊密であることを期して、私のお祝いのことばといたします。

Ⅳ 祝 電

労働大臣 栗原 祐幸

創立30周年を祝し、益々の御発展と関係各位の御健祥御多幸を祈念いたします。

人事院事務総長 茨木 広

創立30周年をお祝い申し上げます。

原子力委員会委員一同

創立30周年を祝し、今後の御発展を祈ります。

厚生省環境衛生局長 山中 和

御盛典を祝し、今後の御発展を祈ります。

厚生省国立公衆衛生院長 染谷 四郎

創立30周年をお祝い申し上げます。

静岡県議会議長 岡本 弘之

創立30周年おめでとうございます。遺伝学研究所によせる皆様の御熱意に深く敬意を表するとともに、益々の御活躍をお祈りします。

国立科学博物館長 福田 繁

国立遺伝学研究所創立30周年を祝し、今後一層の御発展をお祈り申し上げます。

国立国語研究所長 林 大

創立30周年記念おめでとうございます。今後の御発展を心からお祈り申しあげます。

高エネルギー物理学研究所長 西川 哲治

創立30周年おめでとうございます。記念式にあたり貴所の益々の御発展をお祈りいたします。

国立極地研究所長 永田 武

創立30周年を祝し、今後の御発展を祈ります。

東北大学農学研究所長 神田 巳季男

貴所の創立30周年記念式典を祝し、一層の御発展をお祈り申しあげます。

東北大学抗酸菌病研究所長 佐藤 春郎

創立30周年記念にあたり心から御盛典をお祝い申しあげます。

金沢大学がん研究所長 越村 三郎

創立30周年のお祝いを申しあげるとともに、今後の御発展をお祈りします。

大阪大学蛋白質研究所長 角戸 正夫

創立30周年記念式典を祝し、今後の御発展をお祈り申しあげます。

九州大学温泉治療研究所長 中溝 慶生

創立30周年記念式典を祝し、今後の発展を祈ります。

熊本大学体質医学研究所長 宇宿 源太郎

御盛典を祝し、今後の御発展を祈ります。

日本先天異常学会会長 中 野 亨

創立30周年を祝し、益々の御発展をお祈り申し上げます。

日本細菌学会理事長 武 谷 健 二

創立30周年をお祝い申し上げます。今後の一層の御発展をお祈り申し上げます。

元評議員 大 政 正 隆

貴研究所の創立30周年をお祝いし、将来の御発展を祈ります。

元評議員 兵庫医科大学教授 吉 川 秀 男

創立30周年をお祝いたします。今後一層の御発展を期待しております。

国立科学博物館附属自然教育園長（元 庶務部長） 森 永 徳 弘

30周年をお祝い申し上げます。

香川医科大学庶務課長 佐 竹 良 夫

30周年記念を祝し、今後の御発展をお祈りいたします。

三和銀行頭取 明 石 俊 夫

創立30周年をお祝いし、益々の御発展と御活躍をお祈り申し上げます。

オリエンタル酵母工業株式会社横浜営業所

30周年記念の御祝詞を申しあげ、益々の御発展をお祈り申し上げます。

V 創立30周年記念行事概要

1. 記念式典

日 時 昭和54年6月5日(火) 11時~12時

場 所 国立遺伝学研究所 講堂

式 次 第

1. 開 式

1. あいさつ 国立遺伝学研究所長 田島 弥太郎

1. 祝 辞 文 部 大 臣 内藤 誉三郎 殿

日本学術会議会長 伏見 康治 殿

評議員会会長 藤井 隆 殿

日本学士院会員 茅 誠司 殿

緯度観測所長 坪川 家恒 殿

1. 祝電披露

1. 閉 式

2. 記念祝賀会

日 時 昭和54年6月5日(火) 記念式典終了後

場 所 国立遺伝学研究所 講堂

役 割 分 担 表 行事委員 ◎岡、吉田、木村(寅)、大石、大塚、木村(進)

分 担	内 容	担 当	◎主任 ○副主任
総 務	総括・調整 式及び祝賀会の進行		◎岡、吉田(俊)、木村(寅)、松永、賀田、三浦、廣田 ○大石、大塚、木村(進)、五十嵐
受 付	招待者の確認、リボン渡し 資料記念誌等の配布		◎黒田、名和、森脇、杉浦、村上、湊 ○五十嵐、真野、長澤、原礁、露木、岩田、鎌野
案内・連絡	各係への連絡、控室への案内 荷物等の預り、会場等への案内		◎渡辺、原田(朋)、土川、天野、石井、矢野 ○関根、井上(義)
接 待	控室での来客の応待(各部室長) 祝賀会場の接待(部室長) お茶の接待(女子)		◎沖野、(所長室・応接室)山本(け)、荻野、(会議室)鈴木和、山口、青木、境 ○山本(け)、藤中、鈴木(世)、(庶務部長室)干場、安藤、(展示室)西村(聡)、増田、高田
配 車	駅前の案内所でバス、乗用車の配車 来客の出迎 駐車場への誘導整理、来客の運転手への連絡等		◎藤井、野口、佐野、井上(寛)、楠田、近藤、玉井、吉田(嵩)、木村(徳)、斎藤、芦川(祐)、船津、杉本 ○内田、岩城、秋山、風間、半田
広 報	報道関係者に対する応待		◎岡、吉田(俊) 木村(寅) ○大石、大塚
見学案内	展示室各研究部等の見学		◎杉山、山田(正明)、小川、遠藤、藤澤、西村(行)、山田(正夫)
写真記録	写真撮影、式辞・祝辞等の録音		◎中込、安積、高畑 ○越川、佐藤、鬼丸、山本(勉)
設 営	式場、祝賀会場の準備 その他		◎吉田(俊)、今井、井上(正)、篠崎、深瀬、大沼、榊原、原田(和)、芦川(徳)、河西、原澄、岩崎 ○木村(進)、大塚、五十嵐、内田、岩城、秋山、風間
警 備	所内・外の警備		◎井山、河原、藤島、宮沢、田村、三田、西川
会 計			◎木村(進) ○真野
調 度	各種用品の調達、調整		◎内田 ○岩城、秋山、風間、松嶋

3. 記念講演会

日 時 昭和54年6月4日(月) 15:00~17:00

場 所 国立遺伝学研究所 講堂

○挨拶 所 長

○講 演

「環境中の変異原ならびにがん原物質」

国立がんセンター研究所長 杉 村 隆 博士

「Hybrid dysgenesis and other strange genetic phenomena.」

(雑種退化および他の奇妙な遺伝現象)

ウィスコンシン大学教授 James F. Crow 博士

4. 記念誌の発行

遺伝研30周年記念 —創設の頃の思い出— (A 5判 181頁)

目 次

序文 田島弥太郎：遺伝研30年

I 研究所創設の思い出

1. 茅誠司：国立遺伝学研究所の設立に関連して
2. 岡野澄：回顧随想
3. 宮山平八郎：国立遺伝学研究所「設立残念記」から「設立にいたるまで」
4. 塚本盛平：追憶
5. 小出正吾：地元市民の回想記
6. 滝野清之助：遺伝学研究所と私・遺伝学研究所の誕生にまつわる裏話
7. 木原均：遺伝研の敷地
8. 故竹中要：研究所ができた頃の思い出
9. 古里和夫：遺伝研創立の頃の思い出
10. 篠遠喜人：遺伝研のできた頃
11. 増井清：忘れ得ぬ思い出
12. 山下孝介：国立遺伝学研究所創設の頃の思い出

II 研究活動の始まり

13. 木村資生：遺伝研創設の頃と駒井卓先生の思い出
14. 吉田俊秀：赴任の頃—特に小熊先生・竹中先生のことなど
15. 酒井寛一：草創のころのはなし
16. 林孝三：三島の頃の思い出
17. 後藤寛治：創立当時の思い出
18. 加地早苗：創立30周年に思う
19. 大垣昌弘：遺伝研初期の頃の思い出
20. 鬼丸喜美治：九州分室から三島へ

III 建設と運営

21. 田中正雄：専売公社三島分場とタバコ委託研究についての思い出
22. 中村竹：全国種鶏遺伝研究会設立当初の記録
23. 吉川藤一：回想雑感—忘れられない人々のこと
24. 岡彦一：ロックフェラー財団の援助と稲の研究
25. 森脇大五郎：6年間の思い出

IV 環境を守る

26. 辻田光雄：東中学校の工場転換騒動記
27. 小西政三：国立遺伝学研究所の創立30周年を祝う
28. 長谷川泰三：思い出の記

V 心に残る思い出

29. 松村美興子：思いうかぶことなど
30. 宮内千枝：創立時代の研究所と私
31. 門脇淳三：徒然の記
32. 杉生純義：10年間の思い出
33. 丸岡秀雄：三等運転部長の思い出

34. 土川清：ねずみと三毛猫
35. 坂口文吾：遺伝研究足当初の思い出
36. S. S. Rajan：遺伝学者のメッカ，N. I. G.
37. J. F. Crow：三島での1957年の夏
38. 下島儀貞：敷地の選定とその後のこと

VI 職員名簿（現職員と旧職員）

5. 記念植樹

○ 記念式典 出席者

（文部省・文化庁・所轄機関等）

文部事務次官	井内慶次郎
事務次官室課長補佐	佐藤久雄
学術国際局研究助成課長	大門隆
学術国際局研究機関課課長補佐	伊藤才一郎
国立教育研究所次長	原田種雄
国立特殊教育総合研究所運営部長	安間恒保
緯度観測所長	坪川家恒
緯度観測所庶務部長	斉藤正太郎
統計数理研究所庶務部長	山下重明
国立中央青年の家庶務課長	大内登
高エネルギー物理学研究所管理部長	芳賀勝義
分子科学研究所長	赤松秀雄
分子科学研究所総務部長	清水実
基礎生物学研究所長	桑原萬壽太郎
生理学研究所長	内蘭耕二

(関係官庁・大学・附置研究所等)

日本学術会議会長	伏見康治
科学技術庁放射線医学総合研究所長	熊取敏之
科学技術庁放射線医学総合研究所遺伝研究部長	中井 斌
科学技術庁放射線医学総合研究所障害基礎研究部長	石原隆昭
厚生省国立がんセンター研究所長	杉村 隆
厚生省国立衛生試験所副所長	鈴木郁生
農林水産省農業技術研究所長	坂井健吉
建設省中部地方建設局設備課長	岡崎一郎
浜松医科大学学長	吉利和
名古屋大学農学部教授	近藤恭司
東京工業高等専門学校長(当時、文部省大学学術局学術課長)	岡野澄
沼津工業高等専門学校事務部長	金子久弥
静岡薬科大学長(代理)	
日本大学三島学園長(代理・国際関係学部事務局長)	吉原秀夫
日本大学三島学園国際関係学部教授	青木久尚
富山医科薬科大学和漢薬研究所長	難波恒雄
京都大学木材研究所長	樋口隆昌
京都大学ウィルス研究所長	植竹久雄
岡山大学農業生物研究所長	安江安宣

(評議員・元評議員)

評議員(科学技術会議議員)	藤井 隆
評議員(東京大学教授)	井上英二
評議員(京都大学名誉教授・元国立遺伝学研究所長)	木原 均
評議員(東京都立大学名誉教授・前国立遺伝学研究所長)	森脇大五郎
評議員(東京農業大学教授)	近藤典生
元評議員(元静岡県知事)	小林武治
元評議員(日本学士院会員)	茅 誠司

元評議員 (東京大学教授・元日本育種学会会長)

松尾孝嶺

元評議員 (元東京大学応用微生物研究所長)

丸尾文治

元評議員 (元東京大学応用微生物研究所長)

池田庸之助

(学会関係等)

日本遺伝学会会長

大島長造

日本遺伝学会

成瀬隆

日本遺伝学会

大羽滋

日本遺伝学会

北川修

日本人類遺伝学会会長

井上英二

日本育種学会会長

高橋萬右衛門

日本生化学会常任理事

藤本大三郎

日本ウィルス学会総務監事

植竹久雄

日本環境変異原学会会長

杉村隆

日本人類学会会長

渡辺直経

日本微生物学協会会長

日高醇

日本放射線影響学会会長

寺島東洋三

日本蚕糸学会会長

福田紀文

遺伝学普及会

山下孝介

遺伝学普及会

宮山平八郎

(静岡県庁・三島市役所・地元関係者等)

静岡県都市住宅部計画課長

井原哲治

静岡県立三島北高等学校長

鈴木清見

静岡県立三島南高等学校長

鈴木卯太郎

三島市市長

奥田吉郎

三島市収入役

野村勝郎

三島市市議会議長

松田三男

三島市市議会副議長

萩野寛一

三島市教育委員会教育長
三島市立錦田中学校長
三島市立錦田小学校長
三島農業協同組合長
三島市錦田地区町内会連合会会長
三島市錦田地区町内会連合会副会長
三島市錦田地区町内会連合会副会長
三島市桜ヶ丘町内会会長
三島市桜ヶ丘町内会副会長
三島市桜ヶ丘町内会副会長
三島市竹倉
三島市谷田
三島市竹倉

伊東文平
高橋利男
前田義治
加藤實
中山正
高梨英雄
山本源太郎
杉村伸平
水谷元也
吉岡忠博
高畑光弘
芦川銀太郎
石渡武利

(報道関係)

NHK 解説委員
NHK 科学産業副部長
科学新聞編集局
三島民報社

長岡昌
篠崎かよ子
鵜野功
小西政三

(その他)

当時、商工省整理課長
当時、富士産業三島工場整理部主任
前三島市長
尾上病院長
元所長故小熊捍博士夫人
元全国種鶏遺伝研究会常務理事
全国蚕種研究会
大日本蚕糸会蚕糸科学研究所長

下島儀貞
瀧野清之助
長谷川泰三
尾上正明
小熊三千子
中村竹
奥村忠治
横山忠雄

静岡銀行三島支店長	田中 広夫
三和銀行三島支店長	上田 金明
東京電気株式会社社長	駒井 喜雄
日彫塑会員・日展会友	下山 昇
株式会社裳華房社長	吉野 達治
株式会社裳華房	岡 五十
ホーユー株式会社社長	水野 金平
細野カメラ店	細野 尚孝
三共株式会社	平野 光一
株式会社池田理化	池田 寛一郎
オリエンタル酵母工業株式会社横浜営業所	仲川 憲一
オリエンタル酵母工業株式会社横浜営業所	大塚 洋二
船橋農場株式会社	土倉 儀一

(旧 職 員)

大阪府立大学総合科学部教授	大垣 昌弘
前生理遺伝部長	大島 長造
元国立江田島青年の家所長	大友 端立
大分大学事務局長	大谷内 亨
静岡大学教育学部事務長補佐	川島 恵一
武田薬品工業KK中央研究所	菊地 康基
元庶務部会計課技官	栗原 章
東京水産大学事務局長	小泉 清一
九州大学農学部教授	坂口 文吾
京都大学農学部助教授	阪本 寧男
放射線医学総合研究所研究部室長	佐渡 敏彦
東京都立大学理学部助教授	篠田 友孝
京都大学医学部長	菅原 努
東京大学理学部助教授	鈴木 秀穂

早稲田大学教育学部教授	平 俊 文
元東京学芸大学厚生課課長補佐	竹 田 辰 次
北海道大学医学部附属病院事務部長	田 中 六 男
元熊本大学事務局長	塚 本 盛 平
前生化学遺伝部長	辻 田 光 雄
東京国立近代美術館庶務課課長補佐	鶴 見 茂
元東京教育大学教授	林 孝 三
浜松市フラワーパーク園長	古 里 和 夫
元庶務部会計課技官	丸 岡 秀 雄
元鹿児島大学経理部長	宮 沢 正 夫
九州大学理学部教授	向 井 輝 美
放射線医学総合研究所研究部室長	安 田 徳 一

国立遺伝学研究所創立30周年記念行事実行委員会

会 長 森 脇 大五郎

委員長 岡 彦 一

委 員 吉 田 俊 秀

委 員 木 村 資 生

委 員 大 石 達 徳

委 員 大 塚 春 市

委 員 木 村 進

国立遺伝学研究所創立30周年記念記録

昭和 54 年 12 月 15 日 発行

編集・発行 国立遺伝学研究所創立30周年記念行事実行委員会

国立遺伝学研究所内

静岡県三島市谷田1111

印刷所 (有) 東海印刷

静岡県三島市南二日町1-28

